

ベトナムでの
ボランティア体験寄稿

ベトナムで眼科手術をボランティアで行っている服部匡
医師に同行した本学医学生の体験を紹介します。



ベトナムの人たちに光を

医学部 6 年

ユウ ノ ユウ スケ
河 野 雄 亮



“ベトナムの人たちに光を”と、京都府立医大出身の服部匡先生は約10年前からボランティア活動をしてられます。ベトナムの人々に無償で白内障手術を行い、また、現地の眼科医に手術指導も行っておられます。日本国内では、京都府立医大内に NPO 法人を立ち上げ、寄付集め、人工水晶体の寄贈依頼、薬の寄贈依頼、講演などの活動にもお忙しいようです。

そんな服部先生とお会いしたのは、私が聖医祭の文化局長をさせていただいた 4 年生の時でした。後輩が前回ベトナムに同行させていただいたご縁で、聖医祭でのご講演をお願いし、それをきっかけにベトナムへの同行が叶いました。

2011年3月5日から11日間、ベトナムへ出かけました。首都ハノイでの手術のあと、クアンニン省（ハノイから北東へ車で約5、6時間の所で世界遺産のハロン湾近く）という地方で、一日に約70名に無償の白内障手術を服部先生含め3人の医師（2人は先生から指導を受けたベトナム人眼科医）で行う予定で、4 年の島田真実他3人のボランティアの人達と現地に向かいました。ハノイの手術環境はまだよかったのですが、クアンニン省の手術室は、窓や扉は開けっ放し、いつ感染をおこしても仕方がないような環境で「こんな所で手術をしていいのか」と考えさせられました。医療器具もままならず、服部先生は器具持参での手術でした。寄付で集めた抗生物質も持参して使用しておりますが、劣悪な手術環境でも術後感染は防げているようで、人間は強いようです。他の国の医療現場がどのようなものなのか、日本の医療現場との違いにもとても興味を持っており、それを肌で感じる事ができました。

手術の合間や飲み会の席などで服部先生のお気持ちや過去の苦労などをお聞きする機会に恵まれ、その言葉には説得力や深みがあり、その情熱に触れて自分も熱くなりました。毎年休暇を取って日本から手伝いに来るメンバー（看護師他）も多く、その人達のモチベーションも高く、みんな一人一人が目標や自分の考えを持ち、やる気に満ち溢れていました。そんな人たちに同行させていただき高校時代に医師になりたいと思ったその気持ちを再確認し、自分の目指している医師像をベトナムで見つけた気がいたしました。また、世界ではもっと劣悪な医療事情の国々もあり、日本医療の活躍の場があるのではないかと感じました。

6 年生の今、まずは国家試験に合格することが目の前の目標ですが、ベトナムでの熱い気持ちを再び思い出して研修医になったその後も自分のモチベーションにつなげていけたらと思います。

お世話になった服部先生、ボランティアの方々、本当にありがとうございました。



服部医師

京都府立医科大学卒業

2001年、母校で開催された日本臨床眼科学会で偶然ハノイ国立眼科病院のベトナム人医師に出会ったことがきっかけとなり、2002年よりベトナム国立眼科病院で最先端の内視鏡を駆使した網膜剥離や糖尿病網膜症などの治療、指導をボランティアで始める。

専門は網膜硝子体手術で、日本のトップレベル技術を持つ。ひと月のうちの2週間をベトナムで過ごす。



一生忘れられない経験

医学部4年 シマダ マミ 島田 真実



服部先生のことを知ったのは、たまたま学校内のある部屋に置いてあった服部先生の本を手にとった時でした。発展途上国での活動に興味があった私は、すぐにその本を読み終え、服部先生の医師としての姿勢にとっても感銘を受けました。その後、ある時学校の先輩から、実際に服部先生に会いにベトナムに行ける機会があるという話を受けて、これは何かきつと縁があるのではと思い、春休みにすぐ行く決断をしました。服部先生はベトナムを中心とした発展途上国で、無償で医療活動をされている眼科の先生です。半年間日本で働き稼いだお金を遣って、渡航費・滞在費・医療費などを全て自費で賄われています。将来発展途上で活躍したいという夢が私自身もあるのですが、実際同行させてもらって、先生の活動は本当に並みの努力では達成出来ない素晴らしいものであると感じました。

私は、当時5年生の河野雄亮先輩と一緒に、3月5日～15日の11日間ベトナムを訪れました。その中で、服部先生に同行させてもらい、中心地ハノイの国立眼科病院と、地方のクアンニン省という所に行きました。

国立眼科病院では、市で一番大きな眼科専門の病院ということもあって、小児から高齢者まで様々な疾患を持った沢山の患者さんが訪れていました。服部先生が診察を始めると、患者さんが次から次へと診察の様子を覗き込んで扉を開け、狭い所に立ち並んでいました。他の医師も先生の傍に寄り添って診察を観察しているところを見て、服部先生は本当に医師にも患者にも待ち望まれている、ベトナムの期待の星であるのだと感じました。

地方のクアンニン省では、普段医師がいない貧しい村へ行き、医療物資を詰め込んで通訳や

他の医師と一緒に2日間手術を行い、自分もただの学生ではなく一医療スタッフとしてボランティア活動をしているという感じでした。手術道具の準備を行ったり、待っている患者さんと話して気分を和らげてあげたり、点眼を行ったりすることが出来、とてもやりがいのあるものでした。現地の医療スタッフには、言葉が通じなくても積極的に何かやりたいという態度を伝えることで、色々な仕事を教えてもらいました。また患者さんにも、コミュニケーションを取ろうとすることで喜んで手を握ったり笑ったりしてくれ、本当に人の命を救いたいという気持ちや優しさは、言葉の壁を越えて全世界共通であるのだということをも身を持って体感しました。手術の翌日患者さんから、ありがとうと声を掛けられ感謝された時には、目頭が熱くなり、ここへ来て本当に良かったなと思いました。

ベトナムに行き服部先生の活動に同行させていただいて、多くのことを学ぶことが出来ました。先生の、1つ1つの手術に対して準備から術後の診察まで全て自分の目で確認し責任を持って行う熱い姿勢や、患者さんやスタッフから期待し信頼されている様子を見て、医師として将来見習いたいと感じました。また、日本では決して経験出来ないような、ボランティアチームの一員として手術の手伝いをさせてもらえたことは、非常に貴重な経験となり、今後の自分の大きなモチベーションにもなりました。先生をはじめベトナムでお世話になった全ての方々に感謝したいです。患者さんに『将来医師になってまたベトナムへ戻って来て、私達を救ってください。』と言われた言葉を忘れず、実現できるよう頑張ります。



左：服部医師